

て烟り、長き竿持ちし人の堤をとぼくと歸り行くなど、寂しき姿ならぬは無し。いつかは此の驛に寫生に来て、彼の柳、此の水描かんは如何にと互に語る中、汽車は運轉を始めて、漠々たる夕靄深き千曲川の流に従ひ、鏡臺山の麓を迂回して北にくと進み行きぬ。

長野停車場に着きしは午後七時に近く、兼て知れる善光寺前の藤屋旅館に投せんと、大通を右に折れて燈火明き町を行く、夕暮の風はそぶろに寒く、地を挽く金剛杖の音に、往き逢ふ人の顔差し覗くに窮し果て、小腋にはさみて小走りに歩めば、白き狗幾匹と無く尾しだがひ來る氣味悪さ。

斯くして藤屋樓上緞子のカーテン引きし西洋間に、甲斐絹の座布團、珈琲に麥酒、顔紅く耳熱して酔ふて低誦の友が、旅路の歌の興多しや。

澁

仄かなる曉の光玻璃窓の中にさし入りて、星疎らなる空に雁啼き渡る聲遙かに聞こえたり、絞るに重き緞子の幕引けば、朝靄深き西條山の彼方、川中島一帯の平野に、燈火の光白く残りて、所々に立つ炊烟縷々糸の如く、耳聳つれば善光寺本堂に尼宮勤經の鐘の音、新に起りて、明けはなれ行く横雲に遠く響くも尊とじや、
電燈の光ふと消へたり。冷たき風吹き入りて、眺めやる四邊の風物靄に包まれて面白きに、スケッチ始むれば、氷も凍らず手も凍へざるに嬉しくて濡れる空氣の色の不透明に廣がりたる山の麓、仄かに銀蛇を走らす千曲川の水



氣、川中島の白聖の蒼ばみたる陰影など、大凡描き終りし頃は、樓下の街に馬の嘶、下駄の足音、繁く聞こえて、朝日の光斜めに窓にさし入る頃なりき。友なる秋生田子の長野に有るを尋ねたれど逢はず、空しく置手紙して宿に歸れば、跡見子は俄に歸京の仕度して、十一時發の列車に投せんとす、然らば我等も跡見子を見送りて直ちに澁温泉に赴く可しと、用意をこくくに停車場に向ふ。

都出でし時の六人は、日光に湯淺子を送り、此所に跡見子に別れて同行四人、直江津行の列車に投じて豊野に至らんとす、此の間、道は千曲川の流域に沿ひ或は離れ或は合し、茅舎村屋、蕭疎たる間を過ぎて、日光豊かに置る稻田十里の山村を行く、豊野よりは澁通ひの乗合馬車有り、之に乗じて凹凸窮り無き田舎道を駛る。馬丁の年二十計り、喇叭吹くは十三四歳の兒童なりき。赤き鳥居立つ村の鎮守櫓の森、大根洗ふ小川、丸木橋、飛ぶが如くに前に迎へ後に送りて、右に曲り左に曲り、急坂を下りては雑木林の間を抜け、機

音する家を透れば、坦とし砥の如き大道直ちに北を指して、遙かに連る白根山脈の雪日に輝き、雲遠き大空を、烟の如く飛ぶ渡鳥の一群、あれ彼所にこ叫ぶ中、何所とも無く消えて行く。驅る事一里計り、忽ち幅細き暇路にて一群の駄馬の來るに逢ふ、馬は僅かに細き藁繩にて轡を結びしに過ぎず。馬市の還りと覺しく、年老いたる農夫一人、竹の鞭持ちて先に來りしが、我等の馬車に摩れ違ひて、五歩六歩過ぎ去りし時、最後に尾きたる鹿毛の馬、俄に荒れて狂ひ出せり。

道は狭く避く可くも非ず、右は渦卷く急流左は稻刈りし水田、御者は頻りに鞭を上げ馬は勢こめて走らんとして、車は危く斜になり高く低く動揺しつゝ驅け抜けんとす、我等は只片唾を呑んで、咄嗟の策を思ひ惑ひぬ。

僅に馬の静まりしによりて、危き難はのがれしも、其より馬の來る毎に、亦荒るゝかと思送されて心細き事限り無し。懸て道は千曲川の邊に出で、流に従て駛る事七八町、字立が花の舟橋に來りぬ。

橋は數多の舟を並べて、其の上に橋板を渡せるに過ぎずと雖も、矢よりも疾き急流に架したる困難實に思ふ可きもの有り。馬車は渡るに従つて動搖する事甚しく、倒れんとして僅かに支へ立が花の立場茶屋日本屋に着す。沿岸の風光畫の如く、長くうねくする舟橋、其を渡る木樵、牛挽ける子供、白帆上げたる乗合舟、枯草の丘、頂の松、遠く聳ゆる飯綱山、恰も之れ名所圖繪の一頁を披きしに異ならず。馬車の中にて柿を求めて食ふ更に此所より一人の女客を加へて、喇叭吹き立てつゝ馬市場の邊を疾走し行くに、前を走る俣の古風なる、箱の形も幅廣くして、朱漆にて赤くまつ梅と書きしなど、明治初年の錦繪を見る心地して面白かりき。中野温泉を過ぎ田中に至るの間、淋く荒れたる山島、水無き河原、苔蒸したる水車小屋の邊を駛り、妙高山の男々しき姿を後にして、左右に迫り來る小山を目送しつゝ、夕暮近き古川の橋を渡れば、山嵐漸く衣袂に親しみて、鳥時に迷ふ寒林に晚烟の靜かに棚引くを見る。此の附近一帶の風物荒涼として、寒村の夕仄かに夕つづの光を仰ぐ、

畫く可からず歌ふ可からざるの情嗚呼何を以てか之を表さん。

馬車は靜かに柳塘草枯れたる河原を進む。白蘋紅蓼の水漸く冷やかに、前面新に起りたる、山坡遠く、夕靄次第に這ひ行けば、空に透けたる二三の茅屋は墨よりも黒く、左に高き丘の上に村芝居の小屋作るごとく、七八人の壯丁莖を集めて圍をなせり。登れば聽て田中の町に近く、山は次第に高まりて嘈々たる細流の音鶏犬の聲、薄暮の風は旅に疲れたる頬を吹きて、微かに消へ行く夕照の光を仰ぎし時、別れし友の上を思ひて、我等の旅の長きを感じぬ。斯くて道幅狭き澁に入りては、兩側の二階三階鼻衝き合さん計りに聳立ちて、斯かる山驛に思ひもかけぬ電燈の光燦たるに驚かされつゝ、津幡屋といへるに着きぬ。

我等の室は道を隔てし離屋はなれにして二階の十疊火は山の如く、炬燵は暖かに、浴後の一盞電燈の下に圓く座して、途上の風景を論じながら、歸途には千曲川の舟橋描かんと相談して、床に入りしは夜九時に近く、寢られぬまゝに講

談物など借りて讀み初むれば、俄に階段駆け昇る音して、襖明け放ちしは萩生田子なり。

「やあ如何した。」

「やあ君等が如何しても了解らなかつたよ、」

一二年來絶えて逢はざりし友との歡會に、語るは先づ東京の畫界、南信北信の風光明媚なる事にて話長ければ夜も更けたり、時に萩生田子は急がはしげに首を上げて、此の二十三日に長野市に洋畫展覽會の催し有り、殊に其は長野尋常師範學校、尋常中學校、高等女學校其の他の有志より成りしスケッチ會にて、一枚にても二枚にても出來し畫有らば出品して呉れずや、既に會の幹事には是非とも君等に出品せんと約したれば、此の儘にては歸り惡しき切りに我等に説き進めぬ、元來描きしものは途上短時間の寫生に止まり、兎ても満足なる物一枚も無ければ、展覽會は見物したけれど其れ丈は恕せよと請へども更に聞かず、是非なく一二枚つどの約束をなして、二十二日の夕暮

迄に、長野市に入る可く契りおきぬ。

二

澁温泉は長野市を北に去る事七里十六町、山秀で水清く、朝山峽の霜を踏あしたて飛瀑を視る可く、夕に玉玲瓏たる温泉に浴して哀猿の聲を聞く可し、然かも溪山二日の行程を費して白根山麓を遶れば、淺間山の噴烟長く靡く六里が原を眼下に見て、上州草津の温泉に達す、此の道岩高く谷深くして、馬通はず、僅かに牛の背を借りて、追分節面白く唄ふ案内の少女に導かるゝなりと。あはれ畫の如く詩に似たる北信濃路の温泉の宿に、此かる風俗を聞きし我等の心は如何に。我等は又も草津に行かんかと思ひ惑ひつゝ、宿の婢が雪にて既に道絶えたりと語るを聞きて、美しくしき夢の中途にして醒めしが如き思を爲しぬ。

主婢はまた温泉寺の奥、地獄谷の勝を語る。我其里程を問へば、里餘なりと云ふ。然らば午前地獄谷に遊んで、午後は近傍の寫生を爲さんと、朝餉終るや、直ちに途に上りぬ。町の兩側多くは温泉宿又は料理店にして、馬車屋の前を通れば、昨日我等を載せし、額に白き星有る馬は、今日は休みと見へて寢蓐の上に横たはれり。町の窮る所に有るを温泉寺と云ふ、苔深く蔽ひたる茅葺の山門、雨露に年古りては中は傾き、草茫々たる境内に入れば、黄に落ちたる银杏樹の葉堆きはとり、朝あしたの霜白く残りて岩間を漲り落る小瀑の飛沫かゝる所、青き葉黒き岩、板の如く悉く凍りぬ。崩れたる石階を登れば、眞まこと新あらたしき温泉寺の大伽藍あり、之は先年山火事の爲めに灰燼となりしを僅かに再興したるものなりと云ふ。昔時行基菩薩龜神年間此地に巡錫して温泉を見出し給ひし跡なりと聞けど、遙かに點頭さしのみにて地獄谷の坂路に向ふ。

此日空好く晴れて風徐ろに渡り、枯れたる野菊に蝶舞ひ出でつ可き暖かき山

懷を、水蒼き溪流に沿ひ登り坂なる路を唐詩吟ながら北に入れば、溪谷漸く細くなりて、水の音次第に遠ざかりぬ。斯くて山より山谷より谷、薄荆棘の草叢を分けて、俄に立つ山鳥の羽音に驚かされ、まだ解けやらぬ森蔭の霜柱ざく／＼と踏む物寂しさ。山は左程高しと云ふにはあらねども、重疊たる山脈はうねり／＼と長く連り、雲軽く飛ぶ頂は茶褐色に兀げて、空の藍色に對照したる色の面白く、行き／＼と右に細き小徑を下れば此所に潺々として流るる溪川あり。河原の石は白く黄土色を帯び、流るる水は深紅色に瀬を作り潭をなして、巨岩怪石の間を駛る。然かも溪流の上に水氣の起つありて、手を浸せば、熱き事熱湯の如し。猶登る事二三町、水烟靡く河原を行けば、打ち濺けたる兩山の色は全く變りて、灰は白しろき橙黄色を含みし硫黄山は、松所々に生ひて緑濃やかに、赭岩危く其の根に止まれる下を過ぎりて少しく登れば、四山に反響する鳴動の音の凄まじく聞こへて、今や崩れんとするものに似たり、我等は急に足を早やめて、右に折れ左に曲り、蔘まつじから地に其の鳴動の

地點に達すれば、只一軒の旅舎有りて、御料理御休泊の行燈淋しく軒にかゝりぬ。

家は溪流渦巻く深潭の上にかゝれり。見下せば、白烟濛々として雲の如く、灰色なせる霧に映じて七彩を描く日光のかどやき、地には方五寸に足らぬ小さき穴ありて、岩石に圍まれたる間より吐く蒸氣の凄まじさ、四山に轟く鳴動の恐ろしさ。

我等は暫時鉛筆出して寫生にかゝりぬ宿の女房は玉子ゆでと進せんとて、籠に入れたる玉子を川の邊に持ち行きて、岩間に湧く水の中に入れつ。斯くて待つ事十五分計り澁茶啜る間に熱したりと持來るを取れば、皮熱く既に熱して食ふに堪へたり。我等は此所に四山鳴動する中に椽に腰を下して、主婦が物語る山中の風俗を聞く。

主婦は語りぬ、此の奥草津に通ずる山間の細徑を草を分けて登る事三里計り、風の音さつと止まれば他に物の響も無く、雲の中に木樵の歌聞ゆる琵琶

池と云へる一軒家あり。此の温泉は石を以て四面を圍み、湧き出づる湯は溢るる儘に流れて、月も宿す可く、十月過て草津通ひの行商も通はぬ頃となりては、人無き山の寂しさは一層にて、或時木樵の若き男仕事終ての還るさに、雪催の寒さ堪へ難くて石風呂に入らんとすれば、圍みの石に首靠して、五六匹の蛇温泉に浸りて居たり。木樵は例の事と石はごとくと叩きて、蛇追ひ出して浴みて歸りしと傳へ聞きぬ。然かも温泉は少し小高き丘の上に有りて、四面は悉く枯木の山、下は水草茂れる蒼々したる琵琶池に近く、晝も星の影映るとか聞きぬと寂しげに語る。我は此の神話めきたる物語に痛くも心動かされて、暫時空想の楽しみに耽りぬ。

地獄谷を出で、再び溪山相迫る間を過ぎて、旅宿に歸りしは午後二時に近く、馬肉多き所と聞きて初めて之を試みぬ。實に長野より此方、澁に至るの道、牛肉の招牌は見る事なくして白き巾の裾赤く染めたるに馬肉と書きし招牌所々に翻りぬ。

三

此の朝、白き雪軒を埋め路を隠し、さらでも寒き深山嵐は、紛々たる雪を吹きて、静かに近づく喇叭の音は、豊野通ひの馬車なる可し。我等は永く此所に滞在して、雪に閉ぢられん事の恐ろしければ、馬車待たせ置きて、顔洗ひ朝餉したためて、長野行の道程に上りぬ。

馬車は鞭策の音高く鳴つて、飄々たる風雪を飛ばし、灰色に閉ぢられたる空の密雲低く、妙高山黒髪山の姿見れども見えす、山を登り谷に下り蔭地に馳せ下る路傍の寒村又寒村、守る人も無き廢寺の椽に雪白く積みて、戸の破れより見ゆる藁束の散亂せるを目送しつゝ、枯木蕭々と風に鳴る急坂を下る。我等は今深き底まで凍りたる氷の海を歩むものゝ如く、車に置きし雪は馬の尾、車の轆、蹴込の板まで悉く凍らして、死せるが如き四邊の風光は、墳墓

の中に眠るに等しく、寒むげなる老馬の嘶き、喇叭の響、飛ぶが如くに反響しつゝ、田中の町も一瞬に過ぎ、深く垂れたる桐油少しかよびて覺束無げにさし覗けば、満山滿地の白皚々、雪飛び嵐碎けて、風に從て紛々たる雪の一陣又一陣、長風頻りに十里の郊野を渡りて馬の鼻息白く、家も人も森も小山も、世に有る凡てを掩ひ盡して、我等の情を冷却せしめんとす。吹雪の馬車は茫々たる平野を過ぎて、中野を後に立が花に向ひぬ、時に暗雲少しく開けて、雪は雨となり、雨は霧となりて、嬉々たる天日我等が行手を照らしたり。其所には雪の閃耀なく、雨に濕ひし松山、千曲川沿岸の丘陵、畫くが如く、飯綱山高く雲際に聳え、蜿蜒たる一路長くうねりて、雜木山の彼方に消えんとす。

立が花の舟橋に來りし一行は、此所に馬車より降りて、千曲川を描く可く、先づ其の前に晝餉なさんと、藍色の布簾美はしき日本屋の樓上に登る。樓は川に臨み山に面して狭き間なれど、枯れたる柳の枝窓の障子を打ちて、寂し

き立塲茶屋の風情を盡せり。部屋の中央に炬燵有りて、寒さに惱みし手足温むる間に、宿の婢來りて晝餉の膳を運び來りぬ。隣室に酒飲む客二三人有りて、若き女捕へて歌うたふ。女も頻りに笑ひ興じて、徳利の替り目に我が部屋の前を過りては、さし覗きつゝ笑ひ行きぬ。之を飯つぐ田舎人らしき婢に尋ねれば、隣の女子は此所の酌婦にて酒三升位にては赤き顔もせずと物語る。聽て隣の客歸り去れば、隣の女も我等の室に入り來りて、炬燵に滑り入らんとするに、三升酒の女と聞き居たれば、美しき眉も眼に止まらで匆々にして走り出でぬ。

時計を見れば早一時半、五時二十四分發の長野行に乗車する事に定めおきて舟橋の袂、堤防の上に腰を下して水書の道具取出しぬ。我は多くを云はざる可し、千曲川の美は朝夕に有り、我は今其の夕を描く可く、西に春ぐ日光を待つなり、藍色淡き飯綱山、褐色の丘陵舟橋の板、深碧色の水の流次第に輝く斜陽を受けて、光の中に包まれ行けば、我等の筆もせはしく動きぬ。斯く

て知らぬ間に五時も過ぎて、夕風寒く陰影多く、黄ばめる空に飛ぶちぎれ雲爛々として光に溶け、餘光漸く山に移り消ゆるとも無く消え行けば、華やかなりし自然の色は褪するが如くに退きて、光りし水は白く褪め、蒼茫として黄昏るゝ北信濃路の夕の空、さかじき星の瞬きは清く一つ二つ又一つ。あはれ淋しき夕なるかな。

豊野に着きしは七時近く、とある蕎麥屋に入りて酒を命じ、炬燵に足温めつゝ鮫鍋を食ふ。我は餘りの寒さに堪へ兼ねて、嘗て酒飲まぬ身の試に一盞を唇に觸るれば、胸は俄に火を抱くが如く四肢の脈絡は血に燃えて、杳々たる夢幻境は霧の如くに我を襲へり。然かも此の間電光の如く閃めく、過ぎ來し方の旅の思出は、消えては現れ現れては消え、恰も夢を追ふに似たり。斯くして我等は再び善光寺の町に入りぬ。



善光寺

みすゝ苅る信濃の國は、山美はしく水美はしく、自然の寵を恣にせる所、然かも神秘なる黄金の扉重く開きて、梵音微かに曉の空を渡れば、此所に香を焼き經を誦じて、諸惡の消滅を祈る善光寺大伽藍は、屋氣樓の如く朝靄の中に現はるゝに非ずや。あはれ錦の帳、黄金佛、之等血を枯らし情を冷やす教壇に立ちて、諸人が渴仰禮拜を受けさせ給ふ、年若く神々しき尼宮の御身の上は如何に。我は尼宮が朝なく、燭明く輝く陰深なる本堂の、三世諸佛の御前に立たして、經誦し給ふと聞く毎に、悲しき涙は頬を傳はりて落ちぬ。御年は、僅かに花の十八歳、濃き紫の法衣重ね給ふと聞くからに、父母の君



善光寺

みすゝ苺る信濃の國は、山美はしく水美はしく、自然の寵を恣にせる所、然かも神秘なる黄金の扉重く開きて、梵音微かに曉の空を渡れば、此所に香を焼き經を誦して、諸惡の消滅を祈る善光寺大伽藍は、屋氣樓の如く朝霞の中に現はるゝに非ずや。あはれ錦の帳、黄金佛、之等血を枯らし情を冷やす教壇に立ちて、諸人が渴仰禮拜を受けさせ給ふ、年若く神々しき尼宮の御身の上は如何に。我は尼宮が朝なく、燭明く輝く陰深なる本堂の、三世諸佛の御前に立たして、經誦し給ふと聞く毎に、悲しき涙は頬を傳はりて落ちぬ。御年は、僅かに花の十八歳、濃き紫の法衣重ね給ふと聞くからに、父母の君



は如何にか之を思ひ給ふ、昔時は信州の一賤夫、前の大本願主の尼宮の美くしさに、御手を握りし罪科に依りて、幕府の爲めに引き出され、川中島の河原に刀下の鬼となりぬ。然かも尼宮の其を傳へ聞かれし時は、人知れぬ涙に法衣の袖を絞りと云ふ。あはれ此の人知れぬ涙よ。其は只に罪せられし男を、哀憐れむ涙のみには非らず、果敢なくも奇しき縁にまつはられて、此の世を捨てし世捨人の身の上にも、一片猶斷ち難き戀の思を感じて、然かも其の身をかこちし涙に非ずや。嘗て觸れし事なき男の手に觸れたるに、其の賤夫は只一度の握手の爲めに、國の法、教の規の犠牲となりし思の深さに動かされし女の情にあらずや。

我は斯る事を思ひ續けて今の尼宮の上に思ひ至りし時、ミラノの尼寺に隠れたる、レオナルドオ、ダ、キンチの戀人の上を思ひやりぬ。あはれレオナルドオは苦蒸したる尼寺の壁の中に深く籠りて、生涯相見ざりし戀人を思ひて、斯くして不朽の名畫晚餐式を描きぬ、我は其の餘りに詩的に悲しき畫家

の上を思ひて、晚餐式の晝も彼が寂しき涙の痕なる可しと、深き吐息をつきぬ。

此の朝尼宮様の御勤行ありと聞きて、夜未だ明けはなれぬに宿を出づ。いづれも寫生帳持ちて長き石道を登れば、山門の前なる金佛の傍に黄菊白菊南天の紅きを籠に入れたる、花賣の少女と老媪有りて、花買はんかねと云ふ聲哀れなり。花はまだ朝露に濡れて、色香深きに、賣る人は既に艶失せしと未だ蒼なるこの對照も面白く、背負籠負ひし木樵の老爺などの、一錢二錢投げて花を購ひ、御佛の御名稱へつゝ、御堂に登り行くも趣多からずや。

斯くて石階を登り山門を入れば、白き鳩はたくと飛び來りて、豆賣る媪の店の傍に集まれり。試に買て之を地に播けば、ばつと飛び立つて又地に下るもの、小皿持つ手に飛び來りて止るもの、肩に乗るもの幾百と無く、人を恐るゝ様無きが嬉しくて、暫時眺めて餘念なかりき。應て本堂の奥深く鳴る鉦の音聞えければ慌たどしく堂に登りぬ。

絶えず人の足に踏み滅らされし階段を上り、異香高く薫する大なる香爐の前に、三國傳來の淨玻璃をながめ太き圓柱を廻りて、黄金の釣燈籠仄かに輝く下を歩みて、金網張り透らしたる内陣の前に至りぬ。此所には土地の老若男女、市に出づる者、山に行く者、其の日の業を爲すに先ちて先づ手を合し珠數つまぐりて、隨喜の涙を垂るゝ者數を知らず。折しも西條山を離るゝ朝の光は、開け放ちたる東の扉より微暗き堂内にさし入りて、一道の金蛇を走らしつ。其の輝く光を受けて黄金の天蓋、黄金の幡、堆朱の圓柱、彫める額、有る物悉く光を發して、内陣の佛壇高くかかげたる幾百の蠟燭、一時に光白くなりて、雜然たる讀經の聲は堂内高く響きわたる。

我は此所に二三の寫生して、役僧に就て御階段廻りと稱ふる堂下の暗窟に入る可く請ひぬ。緋の法衣着きたる年老ひたる僧の云ふ儘に、太き柱を廻り、塵に汚れし草履穿きて、微かに高き檯子窓よりさし入る光を頼みにて四邊を見れば、箔落したる佛像、白き提灯、葵の紋付きし燈籠など狼藉たる中

に、下に降る大なる木造の階子有りて、其を下に降れば蓆敷きし道は暗黒の羽目に沿ふて行衛を没せり。我等四人は羽目の腰板に右手をかけつゝ、盲の如く探り行くに、忽ち手に觸るゝ太き圓柱ありて、其を廻れば又羽目あり。此の時我等の周圍には微かなる聲ありて、夢の如き響は遠く遠く彼の世のものゝ如くなりき。我等嘗て聞きぬ、善光寺勤行の朝、御堂の中に跪けば、讀經の聲に従て千百の亡者の聲虚空に聞こゆと、今にして此の暗黒なる階下の隧道に、何の聲とも別ちがたき物の音を聞きて、我が胸は跳りぬ。斯くて寂々として冷やかなる廊をめぐりて、中ばに至りし時、がちやりと音して手に觸れし物あり、一所凹みたる板の中央に、仄かに輝く堅きものありて、隣寸擦りて見れば黄金の錠なりき、之をこそ後生願ふ人の尋ね求むるよと見る間に、光は忽ち消へて再び元の暗黒に還りぬ。廊を廻る事更に一回、漸く入口の光を望みて、よし無き悪夢より醒めたる如く、慌はしくも走り出でぬ。其の日は尼宮は病ありて勤經なことの話に、所の名所尋ねばやと、苅萱が親

子地藏の舊蹟往生寺に遊びぬ。道は善光寺の西の丘陵を登りて、戸隠道に入る事七八町、松緑に岩白き崖を攀ちて漸く至る。景の描く可きもの無しと雖も、此の邊一帶の砂山の色珍らしく、殊に往生寺は尼寺にして、色白く聲美はしき若き尼が、腰衣つけて由來記讀むも哀深く、其の女昔時は都に名高き舞姫なりしと聞きて、親子地藏の縁起にもまして心動かしぬ。日光は暖かなれど風寒き日なりき。

午後萩生田子に逢ひて、水書貼る可き臺紙など受取りて夜に入るまでかゝりて漸く出來上りぬ。斯くて使の男に十五六枚の書を渡せしは夜も十一時に近かりしが、窓を開けば明日の會場なる五明館の樓上樓下、縦横に走る影法師映りてアーク燈の光は輝く計りなりき。

十一月二十二日の夜は明け放れぬ。五明館前の大國旗緑門に日の光豊かに射して、陸續として織るが如き人は會場の入口を埋め、往くもの還るもの相呼び相應じて、喧騒なる事喩ふるに物無し。斯くて我等は心憶しつつも催促の使に導かれて、會場に至れば、長野日報の記者某など席に有りて、頻りにスケッチ會出品の製作に就て批評を迫られ、無口なる山本子は初めより多く語らず、中澤子一人責め立られて只思ひしよりは見事なりと云ひて、僅かに其席を去りぬ。

出品點數約二百に近かる可し。中に就て見る可きものは高等女學校製作の圖案にして、調色の巧なるは婦人の手に成りしとは思はれぬ程なりき。宿に還りて先づ寫生せんと思ひしに俄に風邪の心地して頭重く、藥購ひて床に就きぬ。此の間中澤山本岡野の三子は善光寺の全景を描く可く、我を残して出で行きしが、夕暮近くなりし頃は少しく快よく、床片寄せて起き上れば三人は夕餉に遅れじと還り來れり。

夜に入りて今朝見物せし展覽會の作品など評し合へる時、宿の主婢一葉の名刺持來りて中澤様に此の方と御一人御美しき令嬢と、御目にかぶり度しと申すと云ふ、表書は渡邊順と有るに中澤子は頻りに考へしが、了解らぬ様にて、此の方は何方の方にやと問へば、之は高等女學校の校長様にて名高き方なりと答ふ。斯くて階子下り行きし中澤子は、暫時して又入來り、後に續きて六十前後の品高き老人羽織袴の折目正しく座に就けば、更に下髪長く垂れて淡紅色のリボン下げたる令嬢の圓際に座れるを見れば、嘗て中澤子の紹介にて、我が書室に三四度音づれし事ある小笠原嬢なりき。我等は只此る所に思ひがけぬ人に逢ひしに驚きぬ。

老ひたる校長は嬢が叔父君にて有りしなりき。斯くて客人は我等の長野に入りしを新聞にて知りしとて、昨日戸隠山より還り來れる嬢は、一行が途上の寫生帖を見ん爲め、又一つには師なる中澤子に逢ふて、戸隠寫生批評を乞はんとて、叔父君促して來りし由を物語る。

長き冬の夜もいつしか更けて十時過ぎたる頃、叔父君は是非一度高等女學校に來りて覽よと進め給ひしに、さらば明日疾く參せんとの約をなすつ。朝まだき霜いたく置きて寒き日なり。渡邊氏は小笠原嬢を伴ひて、我等が宿を尋ね給ふ。斯くて一行は旅に汚れし古き洋服に、宿の駒下駄借りて、長野聖人の譽高き校長の後に尾して、女學校の門を潜りぬ、地は善光寺西部の丘に位して校舎高く聳え、テニス、グラウンドには既に二三の少女小鳥の如く飛びめぐりぬ。

既にして校舎の玄關に至り、上草履穿きて應接の間に入り、此所に暫時茶に時を移して授業初まりし頃、校内の彼方此方をめぐりぬ。教室は僅かに窓の外より眺めし計りにて浴室に至れば、洗面器十數箇水道鐵管の下に並び、右の隅に約四人を入るゝ可き浴槽ありき。其より寄宿舍に入りて第一の室を開けば、部屋の中央に炬燵有りて、壁には繪葉書數多飾りて、一輪挿の花瓶に菊の白きをさしたるも心憎しや、いづれの室も殆ど同じ様なれど、中には

水彩の畫かゝりしも有りき。食堂にては黑板に書きし今日の獻立書を見るに、大方は手作りの野菜を用ゐて極めて質粗なる様なり。再び應接室に歸りし時は十時に近く、戸隱にて取りしと云ふ、雷鳥の白き標本など見終りて別を告げつ。宿にかへれば既に晝食の刻となりぬ。此の日岡野子の知れる堂照坊に轉じて、一行は思ひくの寫生に出でしが、夜に入りて渡邊氏は再び尋ね來りて、我等が一週間計り諏訪に滞在すと聞きて、小笠原嬢を同行願はれずやと頻りに頼み聞えたり。諏訪は元來油畫具送りし先なれば一週間は是非とも滞在する事に定まりし事とて一行は僅かに承諾の旨を述べつ。

斯くして我等は此所に小笠原嬢を加へて凡て五人、二十六日の朝まだきに善光寺を發足しぬ。

西條山下千曲川と犀川との合する所、川中島一帶の平地を過ぎて、篠井線によりて鹽尻に向ふ。山又山の斷崖絶壁は次第に現れ來りて、土赤く岩黒き山に沿ひ、松林の間を走り、隧道を出づれば、山下の平地を流るゝ更級川は恰も匹練の如し。此の日天空晴朗、初冬の風は嘯くが如く、田野遠く開けて、段を作り層をなしたる山島つゞき、森現はるれば茅舎隠れ、水車動き溪流細く流るゝ谷を下り、更に黒暗々たる隧道を過ぎれば登り坂の軌道は左に折れつゞ、赫々として日光に輝けり、登りはてし所は姨捨停車場にして淋じき兀山の中腹にある茅舎三四、之を八幡の寒村とす。

我等は此の荒廢せる山村の茶店に腰を下して、澁柿と蜜柑を購めつゞ、田毎の月の舊蹟を尋ねたり。茶店の老媪は山腹の銀杏樹黄に岩黒き所を指して、彼れぞ即ち姨捨の月見堂なるといふに、然らば次の發車まで靜かに遊ばんと、打つれ立ちて坂路を降る。

姨捨山の月の傳説の美はしさよ、山は蒼深く雲空しく飛びて、訪ふ人も無き峰の庵に、獨り淋しく老の月眺めし姨が心は如何なりしぞ。我等は今此の山に立ちて、木枯淋しく吹く古昔の蹟を訪はんとす。

大鼓岩の下、月見堂の椽に据して、遙かに山麓を下瞰すれば、打開けたる大谷の彼方、鏡臺山は午に近き日に照らされて、細き皺皺も指す可く、蜿蜒たる連山は南より北に長く延びて、遠霞の中に消え去れり。山の麓白く流るゝ更級川の沿岸、眼を凝らせば僅かに日傘させる行人の歩むを認む可く、麓より次第に上り來る路は多くは井然たる水田にして、褐色の雜草枯れたる萱、石塊多き間を通じて更に右に停車場に達せり。

月見堂は周圍五間に満たす。擬室珠を載せたる苔深き茅の屋根、素木の高欄しらぎ素木の階段、數百年の雨や風や露に朽ち霧に腐れて、僅かに形を残すに過ぎず、されど前つ世の歌人多く來り俳人數度尋ねし舊蹟と思へば、我等が此の行も何と無く一種の情を催し來りて、心なき身に歌思ふもあはれをかじき旅

の興なるかな。

月見堂を出で、長樂寺を訪へば老ひたる寺僧の腰を曲げて出来り、我等の一行の餘り怪しき姿なると、小笠原嬢の都めきたる海老茶の袴を見比べつゝ、恭しく跪きぬ。我等は此所に紀念の寺の印求めて、懸て芭蕉翁が碑の前を過ぎ石階を下れば、廣き暇路は水田の間をうねりくゞて下に下にと曲り行く。

山の色の茶褐色は下るに従て蒼色を加へ、稻村幾つと無く山坡の上に並び、ひよろくゞと高き楯の四五本其の間に立てる、上の田より落す水は下の田の園りを流れて、更に下なる田へ逃れ行く水の清らかなる、白く光る枯尾花、風に吹かるゝ赤蜻蛉、此等野趣多き坂路を、次第くゞに降り行けば、小高き丘の上に二尺計りなる、古りたる石地藏の道に背きて立てる有り。之路行く農夫に問へば、行所ぞ田毎の月にして、田の數凡て四十八枚、昔時より月の名所なりしが、初め地藏尊も道に向て立てしなるに、月出づる頃にな

れば、一夜の中に田の方に向きて、月を見ることの尊高く、元の如く道に向かすれば、其の夜必らず又田を向くに困じ果て、月見地藏と名けて、其の儘此所に祭りしなりと語る。

然らばとて土手に登れば、田は云ふ如く四十八枚、されど大さ疊一枚程にして稻蒨りし跡と見へて、水無き山田は何の風情もあらざりき。

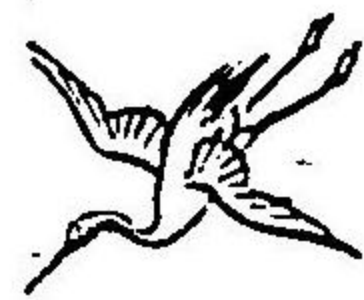
此所に止る事二十分計り、既に發車の時も近づきしに鉛筆スケッチ二三葉して、靜に坂路を上に登れば、ふわくゞと綿の如き雲香かに動きて、長閑なる事限なく漸く停車場に近づきし頃は彼方なる松山の下より隧道出る瀛車の響、山々に反響して、煤烟雲の如く横に靡きぬ。

再び鹽尻行の列車に乗じて、隧道幾つか越して谷深き山の峽を出れば、名も知らぬ飛驒の山々西の空に連りて、其の下に敷く松本の平野の中を、銀蛇の如く北に走るは犀川の急流。森、田甫、赤き社の散在する間を過ぎて、松本城の白塼を停車場より望みし時は午後三時に近く、晝餉求むる暇なかりし

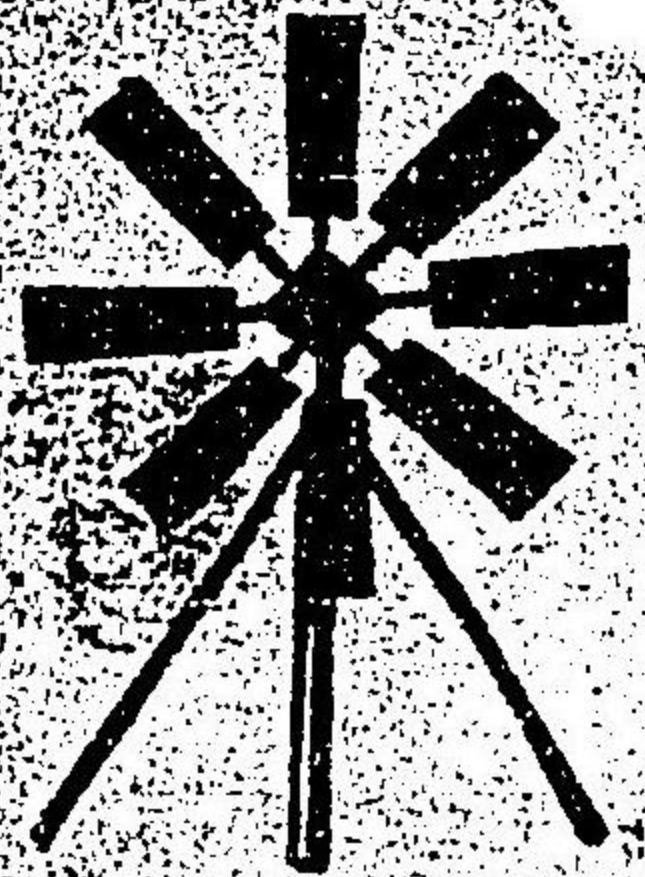
爲めに、僅か二十錢の麵麩に餓を凌ぎし一行の心細さ。殊に小笠原嬢は、初旅の第一日に、此かる哀れなる晝食をなせし傷まじさ。然れど無邪氣に笑ひてのみ過さるゝに少しく心安まりぬ。

松本よりは沿道の風景頓に變りて、小松多き野原、灌木の林、桑圃續く村を走りて鹽尻に至る。鹽尻は木曾路、善光寺道、甲州路の別かるゝ所、飛驒の山脈高く西に聳ゆるを後に馬車を驅て夕日薄るゝ廣野を横ぎれば、風徒らに寒く吹きて、微かに光る太白星。あはれ此の夕、月あらばと果敢なき事も望まれつ。

斯くて馬車は鹽尻峠の麓、古昔は本陣なりしと云ふ柵屋に着きぬ。



諏訪



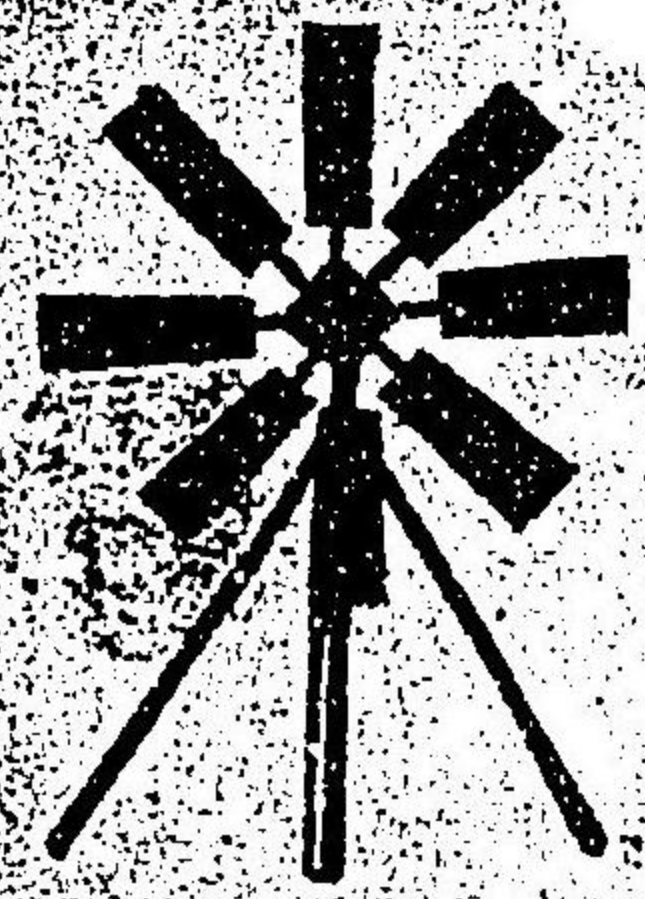
爲めに、僅か二十錢の麴麩に餓を凌ぎし一行の心細さ。殊に小笠原嬢は、初旅の第一日に、此かる哀れなる晝食をなせし傷まじさ。然れど無邪氣に笑ひてのみ過さるゝに少しく心安まりぬ。

松本よりは沿道の風景頓に變りて、小松多き野原、灌木の林、桑圃續く村を走りて鹽尻に至る。鹽尻は木曾路、善光寺道、甲州路の別かるゝ所、飛驒の山脈高く西に聳ゆるを後に馬車を驅て夕日薄るゝ廣野を横ぎれば、風徒らに寒く吹きて、微かに光る太白星。あはれ此の夕、月あらばと果敢なき事も望まれた。

斯くて馬車は鹽尻峠の麓、古昔は本陣なりこと云ふ榊屋に着きぬ。



諏訪



諏訪

幼き昔名所圖繪繕きて、松並木美はしき中仙道、熊の皮賣る木曾路の畫を眺めて、如何に珍らしくも面白く感じたりけん。而して今鹽尻町を立ちて、諏訪湖に向はんとする道の初めに於て、我は所謂中仙道の松並木を眺めたり。其は鹽尻峠の麓より、頂上に至る舊道にして、町外れの小橋渡りてより、斷續して立てる赤松は朝の露を帯び、だら／＼上りの路の兩側に茂りて、梢吹く風／＼と響けば、地に引く松影頻りに亂れて、ばら／＼と散る木の葉の雫。

道は流石に街道筋なれば幅廣けれど、石多く土は崩れて凹凸甚しく、紅き緒

の結付草履して、我等の後に尾く小笠原嬢の、歩み憐む事屢となりき。鹽尻より下諏訪まで、荷物かつぎの男僱ひたるに、背負ひ馴れぬものを覺しく、五六歩歩めば息を吐き、一町行けば石に懣ふて、後る事甚しく、遂には草に座りし儘苦しげに呻き出して、兎ても行かれねば止め度こと云ふ。道の程を問へば、一里を過ぎしと答へて、定め金を強請るものに似たり。思ふに町を出でしより僅かに三十分、坂路なれば一里にも足らず、然るを勞を惜しみて金貪らんとする面憎さよと思ふ間も無く、岡野子は受取りし荷を一行に分ちつゝ、貴様の一里は日本の一里か、まさか六町一里でもあらざる可こと叱しぬ。

斯くて一行は老爺に賃金の半額を與へて、各々背囊を肩に負ひ、金剛杖突き立て、鹽尻峠の山腹を上る暖き事春の如し。道は今松原續き草枯れて、清水流るゝ萱野を通りて、右に左に迂回しつゝ、虫の音悲しく聞ゆる森を過ぎ礫石美しく敷きつめし新道に出づれば、十四五町にして峠の頂に達す。見下せ

ば此所に畫の如き諏訪の湖。

あゝ美はしき諏訪の湖。我等は既に中禪寺湖を去りてより殆ど一箇月、山又山の信濃路に入りて、眼に見るものは四圍の連山、朝夕の雲、廣濶なる自然に離れし身の、今俄かに此の渺茫たる大觀に接して、胸跳らせしも宜ならずや。峠は下り二十町計り、石多き路をうねりくゞて、杉暗き麓の森を過ぐれば、田家三四軒を並べる小村有りて溝を走る清水は路の左に流れたり。斯くて生籬續く山口村の端れに出づれば、石多く水枯れたる河原有りて、柳の大木は河添路に連なりぬ、此より下諏訪まで一里の間、坦々たる道は一直線に東に走りて、左右は悉く稻蒨り果てし茫々たる水田、小さき森、小高き丘陵、赤き鳥居は其の間に點在して、其の上に連る褐色の山。かくて我等は無意味なる歩調を以て、此の新道を行き盡しぬ。下諏訪停車場に至らんとして、先づ時計を見るに、發車には未だ一時間を餘しぬ。然かも午過ぐる事既に二時、今日も亦晝餐抜くならんと思ひし折なりしかば、直ちに下諏訪社頭の料理店

に入りて、牛肉鍋を命せり。此所も暖き炬燵を備へ池には泉水ありて、鯉鮒の類遊ぶも面白く、名物なれば飯來る間を、榎櫛購めて味ひぬ。晝餉果て停車場に着きしは、發車に先づ事二十五分、斯くて岡谷よりの列車に乗り込みて上諏訪に向ふ。

三時過ぎたる日の光は列車の窓を斜に射て眩き許りなるに、沿道の人家多くは毛氈を敷き客を招きて、物珍らしげに瀛車の走るを眺むるもの數を知らず、土手の上には小學校の先生らしき古き洋服附けたる男、兒童二十人計りを引き具して、我等の瀛車を指しつつ、何事をか語る様なりき。之を他の乘客に尋ねれば、此の二三箇月前僅かに此所に通じたるものなれば、片田舎のものは更なり、土地のものさへ珍らしく思ひて相携へて見物に來れるなりと。道は小やかなる砂の崖を下りて、遂に湖水の沿岸に出でたり、あゝ何等の風光ぞや、山は紫に連り水は夕陽に閃めく所、雲靜かに影を落して寄せては返すさざれ波、漁る舟の白帆も遠く霞める彼方は、高島城の城址なる可し。か

くて網干す漁村と赤土の崖を過ぎ去れば、蘆花風に靡く一帯の平沙長く連れる岬有りて、其を遶りて左に高き丘陵を迂回すれば、其所に現はれたる上諏訪町の瓦葺粉壁。

三十分の後我等は牡丹屋樓上の客となりぬ。

二

朝眠り醒れば、星明りさす欄干に立つ人有るに驚きて障子開けば、未だ東雲の光達かぬ湖水の面を見やりつゝ、長く垂れたる黒髪を、白き手に結び居るは小笠原嬢なりき。

嘗ては炬燵の中に寝そべりながら、煙草燻らせし殺風景なる旅は、今此の新しき生活に蔽はれて、散らかす後より絶えず掃除して行く、小笠原嬢の厚意も無にし難く、初めは少しく窮屈なる思をなせしも、馴れては自ら愼しくな

り、無邪氣なる娘が戸隠山寫生の話に、笑を催せし事度々なりき。
 此の日空なごり無く晴れて、朝靄深かくりしが、我等は上諏訪の宮に詣でんと、寫生帖持ちし計りにて、宿を出でぬ。
 町を東に離るれば、水田をこめし朝靄深く、稻村は更なり、諏訪湖名物の風車、風に鳴りつゝ遠く烟り近く霞みて、田浦の所々に湧く温泉の煙と打混りぬ。然かも朝日は紅く靄に溶けて、打霞みたる野も山も、田も湖水も、悉く一つ色に輝く美はしさ。水畫に描かば面白かる可き所も過ぎ、柳立てる野菜市場のスケッチして四五町計りも行けば些か高き堤防有り。之に登れば諏訪の湖一望の下に集りて、葦叢枯れて砂黒き水際の彼方、釣する舟の浮べるを見る。

角間川を渡れば、枯草の堤防に日光豊に射して、北を圍める赤土山の半腹より、麓にかけて白き幟數限り無く立連らなるを何かと見れば、日本第一大軍神と記せし下に、某村某の健康を祈ると有るは、出征軍人の遺族なる可し。

斯くて小川に沿ひし細徑を進みて、明神の社頭に至れば、稍坂をなしたるだらく道に、榛の大木ありて、古りたる石燈籠の笠、御手洗の屋根風につきりし落葉は山をなしぬ。橋を右に渡りて、大なる石鳥居の下を潜り、繪馬堂を横に古りたる廻廊をたどり行けば、左右の羽目に懸けし額椽は、劔の形を金にて作り、何の年何の月生と記せる、出征軍人の健康を祈りしもの數を知らず廻廊の長さは約百間、其を行き盡せば、左に石の階段ありて、古風なる組燈籠の下は一面の石疊、拜殿は其の左に有り、菊の紋付きし紫の幔幕靜かに風に動きて、何と無く神寂たる趣を備へたるに、殿内俄かに笙篳篥の音囀りと起りて、神饌を供ふる神官の姿、微見えたるも尊かりき殊に五六日中には、平和克復の勅使立つとの噂高く、凱旋兵士の軍服の儘來りて、此所に參詣する者數を知らず、其の後より嬉しげに尾さ行く老夫婦の顔など、見るからに晴々しく、行き逢ふ者の顔も喜びの色にかゝりやきぬ。

社を出で、大華表前の古き料理店に登りて、晝食を濟ませ、其所ら面白き景

色の寫生少し爲て、歸りの路に就けば、夕日斜めに射す驟路の、水有る所は悉く金色に輝きて、風車の音白き幟、何となく和蘭土あたりの水國の風俗も偲ばるゝに、ダツチスクールの畫など頻りに連想されて、風車の寫生をせし事兩三度になりぬ。

宿に着きて其の日は既に暮れたれば、無す事も無く、明くれば高島の城趾尋ねがてら、湖水に近き宿求めに、遊廊の傍より橋を渡りて、桑圃の間に入れば、波ひたくと囁く枯蘆の中に、白き端艇青き端艇横はれる有りて舟遊の客待つものゝ如し、右に湖左に入ッが岳の峻峰を望みつゝ行く事一二町にて深き濠有り。水草おがた夥しく茂りて苔蒸せる石垣高く、麗らかに晴れたる空の浮雲は、今しも笠の如き松の上にかゝれり。橋を渡れば即ち高島城の舊趾、櫓の跡ある小高き石の階段を昇りて、芝生の上に立てば、清澄鏡の如き湖と空とは一望の下に集りて、日の輝く所蒼き朝霧僅かに晴れて水村山廓の趣美はしき事限無し。遙かに聳ゆる乗鞍が嶽の白雪、鹽尻峠の蜿蜒たる山又山、

鯉網干す家、岸の柳、空行く白雲、繋げる舟、閃く白帆は水に映じて、長く伸び波に断たれて、靜かに動き、枯蘆の中より急に漕ぎ出る小舟の中には、白き手拭頂きし若き女の、野菜積みたるなど、畫にこたき眺め少なからず。微かに聞ゆる紅樓三絃の一曲水に響きて、多恨の歌は郎を思ふの情なさけも深く、旅に聞く身の哀いどどしく胸に沁みて、暫時水の面にながめ入りしが、聽て枯蘆深き湖傳ひに、温泉所々に湧く田甫の中を、湯の脇新道の方にたどり行けば、路傍みちばたの板屋の蔭に地を掘りて作りし風呂ありて、子供連れたる女の寒ければ風呂に温り、温まれば直ちに風呂の中に立ちて、素裸の儘洗物に餘念なきを見て、世にも氣樂なる境涯を羨しく思ひぬ。斯くて尋ねあてしは若松館と云へる、湖水に沿ひし新しき旅籠屋にして、南の部屋よりは湖水の全景思ふ儘に見ゆるを喜び、直ちに此所に移る事と定めつ。牡丹屋に歸り荷物引纏めて出立んとする時、山國の定め無き天候俄かに變りて、ばらりと落し來る時雨は板屋の石を打ち、湖水の面霧に隠れて、いつしか山も消え行きぬ、

雨は陰晴窮りなき雲につれて、粉の如き雪を混へ來り、みぞれになりて風になりて、寒さ頻りに襲ふとすれば、雨は又もや雪に變りて、見渡す限り野も山も、家根も湖水も白く埋れて引移る事六づかしきに、晴間を待てば應て二時間計りにて全く晴れたり。然らばと仕度して道に通運會社支店より、預けし梓と布とを受取り、若松館に引移りぬ。

夕暮湖水の寫生なさんと、珍らしく油畫の道具を出して、山本中澤二子は夕映の湖水を、岡野子と小笠原嬢とは稻村と雪積む山と、我は獨り離れて白く褪めたる夕の水と、暗き山とを描き初むれば、折しも三日の月淡く湖水の波を照らしたり、思はず胸跳りて急しく筆動かすに、背後に迫る夜の色彩次第に深くなり行きて、パレットの色も臙になれば、是非なく宿に歸らんとす。遠く近く町に點せる燈火の光、ちらちら見へて、風有る空の夕の星屑光寒げに瞬きぬ。

三

諏訪湖畔の我等毎の生活は、如何に楽しく美はしかりとぞ、朝は睡れる山の姿、美しき日光に輝きて、紅の霞渡る湖上の波を眺めつゝ、畫談に果しなき時を過し、夕は廣き浴槽の中に煙草燻らしつゝ、外面の暮色ながむる面白さ、夜の炬燵に小笠原嬢が歌語り、岡野子が飄逸なる川柳調、我が讀む講談物に夜の更くるも知らず。時には宿の主昇り來りて、諏訪の風俗語るも珍らしかりき。

主は斯く語り出たり、夏の諏訪は風涼しく温泉多ければ客多けれど、面白きは冬の中一月二月の頃なる可し、湖水の氷十二月の末に張りつめて、其の頃渡るには未だぎし〜と音すれども、神渡りと稱ふる日に湖水の中央に龜裂出で來りてより、土地の者いづれも往來して、氷破れしと云ふ事を聞かず、四方の山々雪に埋もれ、湖上の氷は日光に映じて、光り耀く美しさ、子供は氷

滑りに朝夕を楽しみ、鯉釣るものは氷を切り穴を作りて、網を下す。之より捕る魚の丈は普通にて三尺、鮒の一尺は珍らしからず、又秋の洪水には、鯉も陸に上りて四尺位のもの生捕る事も度々なりと、主人は其の夕鯉こくを膳に上して、所謂三尺の鯉を示したりき。

都よりの書状來りて、岡野子は急に都合を生じ、十二月四日此所を出立つ事となりしより、小笠原嬢の歸京には殊に都合よければと、一行悉く四日の朝まだきに諏訪を出發する事と定めつ。描き了りし油畫水彩の多くは、箱に詰めて通運に托し、快よく待遇せし宿の主人に別を告げて出立たんぞす。

此の日珍らしくも風無き空の雲薄く、朝日暖かに霜を溶かして、見渡す湖水の彼方此方、立のぼる水蒸氣は恰も靄の如く、街道を行く馬の鈴の音車の轟き微かに聞こへて、爽やかなる事限りなかりき。斯くて二人の東歸の客は、我等の出發に先立つ事一時間計り、流笛遙かに湖上を渡りて、下諏訪の方に聞こえし時、急がはしく別れを告げて、一人はリボン紅く海老茶の袴穿きて、

油畫の箱肩にかけ、一人は汗染みたる洋服に背囊を負ひ、金剛杖に草鞋脚絆の行装、人目には兄妹とも覺しき二人連、さらばくと計りに朝日に向つて旅立つ影のをもしろや。

靄に薄るゝ二人の影は、見る間に家の蔭に入りぬ、十分の後停車場に鳴る發車の流笛、あゝ遂に友は都に去れり。

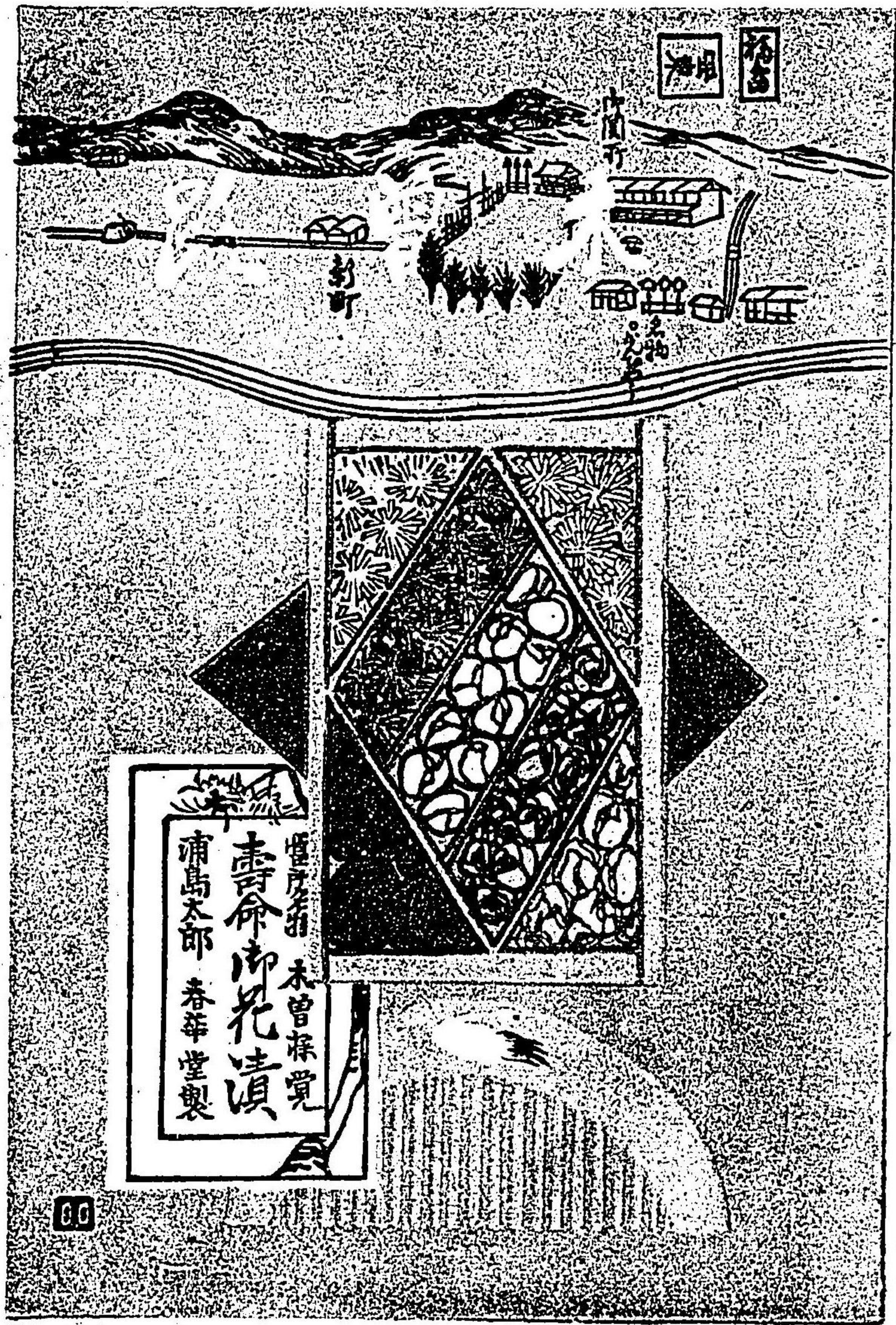
あはれ淋しき別れなるかな。かくして日光に別れ善光寺に別れ、諏訪湖に別れし友は、皆都に歸る喜あれども、我等は更に西の空、木曾の深山に分け入りて、愈々都に離れんとす。



木曾路

華やかに楽しかりし諏訪湖畔の七日は、夢の如くに過ぎて、友の二人は都の空に、東と西と道を異にして、之より雪降る木曾の深山、命をからむ焉かつらの舊跡尋ねばやと、同行三人、岡谷行の列車に乗り込みて、再び湖畔の風光を眺めつゝ、目に馴れたる下諏訪の停車場を過ぐれば、道は次第に懸崖に沿ひ、蘆花日に耀く水湍を傳ふて、漁村の柳風に靡く邊を走り、空に浮べる白雲、水を行く舟、見る／＼中に蘆に隠れ林に隠れて忽ち一小丘の上に達すれば、岡谷々々の聲飛ぶが如くに窓を走る。

冬なれど暖かき眞晝の光に背を照らされて、岡谷の町を過ぎ、鐘樓立つ四つ

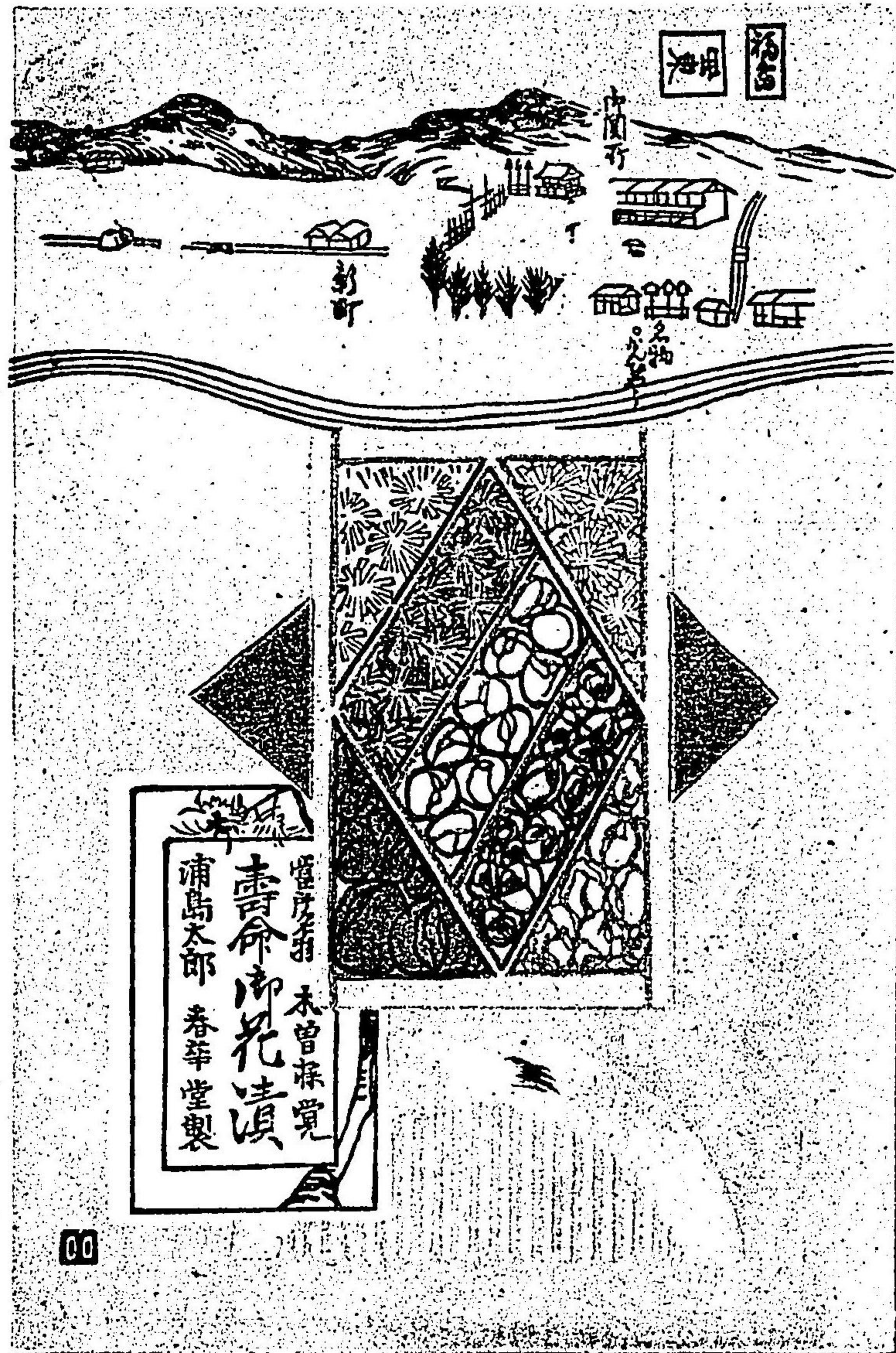


木曾路
壽命御花漬
浦島太郎 春華堂製

木曾路

華やかに楽しかりし諏訪湖畔の七日は、夢の如くに過ぎて、友の二人は都の空に、東と西と道を異にして、之より雪降る木曾の深山、命をからむ葛かつらの舊跡尋ねばやと、同行三人、岡谷行の列車に乗り込みて、再び湖畔の風光を眺めつゝ、目に馴れたる下諏訪の停車場を過ぐれば、道は次第に懸崖に沿ひ、蘆花日に耀く水清を傳ふて、漁村の柳風に靡く邊を走り、空に浮べる白雲、水を行く舟、見る／＼中に蘆に隠れ林に隠れて忽ち一小丘の上に達すれば、岡谷々々の聲飛ぶが如くに窓を走る。

冬なれど暖かき眞晝の光に背を照らされて、岡谷の町を過ぎ、鐘樓立つ四つ



辻を左に入りて、次第に山路深く分け上れば、松暗く茂れる九十九折つららまじりのうねくくと曲れる角に黒き岩有りて、枯尾花白く風に靡きぬ。枯れたる松葉、枯れたる雑草の間に籠をおろして、松の影地に印する小山の上より、ころくくと轉がり遊ぶ山家の子供に峠の道を尋ねれば、遙か高き松山の彼方を指して、白きツツクの獲かつぎし、郵便脚夫の後に續けと叫びぬ。我等は急がはしく其の後を慕ふ。

だらく上りの赤土山より、松蒼き尾上にかけて、豊かに射したる日光は背に汗する計り暖かく、碧き空白き雲の僅かに覗かるゝ樹の間を過ぎて、岩多き松林の細徑に入れば、鳥の如く見え隠れする郵便脚夫の姿いつしか消えて、水緑に蘆花白き、静かなる湖の邊に出づ、此の所落葉松の黄は落ち盡して、人跡絶えたる山中の寂しさ譬ふるに物無く、山の色、水の色、樹の色、草の色、凡て美はしけれど、沈みたる色調のデコールのきたる面白さに、暫時息やすめの寫生して、更に荆棘入り亂れたる崖を起ゆれば、礫石多き新鹽

尻峠の新道に出づ。

車引く男荷馬車の轟き、干魚賣の行商などの行く後を尾して、冷々と頂うなぢに寒き峠の風に吹かれながら、絶頂近く達すれば、此所に干大根釣したる茶店有りて名物甘酒雜煮の招牌をかけたなり。

珍らしければ一碗を試みばやと床几に腰を下せば、眼下に展開されたる諏訪の湖は日光に耀きて、遙か蒼空に接するの邊、八つが岳の右に當りて富士の白雪鮮やかに、玉の如く花の如き清秀なる姿は聳えたり、あはれ今朝別れし二人は、甲府あたりにて彼の山の白雪眺むらんと思ひやりて、甘酒の中に切餅入れたるを食ひながら談ふ。

鹽尻町までは約一里の間、草原つゞきの裾野吹く風、山の北なれば俄に寒く、兎の如く真下りに駛り下れば、荆棘茂りて道をふさぎ、清水湧く沼、焼石の原、雑木林の間を過ぐれば、鹽尻驛の外れに出づ。此所より道を大門に取りて、樗高き街道筋を洗馬に進めば、四面は只低き杉山つゞき、廣茫たる桑畑

にして、折々高き丘の中腹に白堊點々たる村落を見る。行く事未だ一里に満たず、我等は不圖鏘々として流るる溪流の音を耳にせり。水は數十丈なる絶壁の下を繞りて、砂白く岩黒き間に深藍色の奔湍を作り、遙かに長光寺村の白堊に對す。全山の紅葉既に褪せて、頂は只茶褐色に陰影は紫色を呈したるが日に霞みて、川に沿ふて起伏する連山、或は常磐木の蒼黒きあり、花崗石を露出したる元山の白きあり、我等の道は絶えず此の奇景を眺めつゝ、松大なる坂路を下れば、此所に唐破風作りの古雅なる建築の古驛を認めたり、之を洗馬村せまといふ。

道の左右には清水流るる小溝ありて、宿の入口古き二階家の軒に、「舊蹟木曾公馬洗ひの清水」といふ古招牌かんぱんあり、幾年月の雨露に黒みて、文字の蹟さだかならぬに、昔時の事も偲ばれて、家の横なる小路を入りて清水の蹟を尋ぬるに、雑草生ひ茂れる崖は崩れ木は倒れ、見るからいふせき草叢の蔭に、四五尺計の石垣ありて、苔蒸せる筧より落つる清水は、冷やかなる事氷の如く、

玲瓏として玉より清かりき。我等は此所に顔洗ひ口に含みなどして、再び元の道に出で、疲るゝ迄も歩行かばやと談合ひながら、坦々として砥の如き河添道を進み行きぬ。

驛を離れてより絶えず轟く溪流の音を右にして、桑の畑、杉の森、大根干す家、赤き鳥居、篋の清水など忽ち來り忽ち去る、四邊の風光に送られつゝ、次第に迫り來る兩山の間を、眞一文字に突き進めば、折から奈良井に返る鹽尻通ひの馬車ありて、頻りに我等を誘ひぬ。諏訪を發する時我等の豫算は、木會路に五日を費して、名古屋に至る瀛車賃をも加へ、囊中残す所十五圓に充たず、されば一人の費用僅か五圓を以て、如何にもして名古屋に達せざる可からず、思ふに此所に鳥居峠に至るの道、犀川の沿岸多少の風光無きにも非ずされど木會川の沿岸、棧に寢覺の床に、幾日かの寫生を數へざる可からざれば、寧ろ馬車の便を借りて今宵奈良井に至るにしかすと、漸く馬丁に談じて之に乗る、時に午後三時に垂んとす。

馬車は本山を過ぎてより愈疾く坦々たる大道を山又山の際傳ひ、右には絶えず激流を隔てゝ削りなしたる絶壁に接し、飛ぶが如くに疾驅する奔馬に繋かれる車體危く揺れて、倒れんとする事數度。櫻澤は木會と伊奈との界、御境橋より西は木會路に入ると、馭者が手綱繰りながら語るを聞きつゝ、家根より垂れし蓆かゝけて、夕空に薄るゝ日の光弱きを仰ぎ、明日は雨にやならんと心細げに友のいふを、いや、今宵も如何ある可きと馭者は頻りに鞭をあげたり。

斯くて馬車は夕に迫る寂しき道を揺られゝて進む程に、夜の色次第に四山を蔽ひて、星の光漸う冴えまされば、馬車の中に敷きたる藁に些かの温みは有れども、足の尖凍えん計りに、面を掠むる風飄々として高く鳴りぬ、宮澤の立場茶屋に至りし頃は、夜も六時を過ぎて、店の洋燈の光黄に美しく、暫時馬糧飼ふ間を、居爐の上に櫓かけし大なる炬燵に足を入れて、休みしも、何と無く珍らしかりき。其よりは雲少しく出で、星の光危うげに眺めらるゝに、贊川の宿を過ぎて、奈良井川の淺瀬に沿ひつゝ、路傍の躲風呂に、丸

き金燈籠の燈火點せしを幾度か顧みて、奈良井の宿に着きしは午後七時過ぎ、馭者の案内に従て越後屋と云ふ旅店に投ず。部屋は二階の八疊間にして、早くも炬燵に火は運ばれ、黒蠟塗の衣桁に我等の旅装はかけられたり。風呂に入りて先づ悠々と炬燵に滑り込めば、宿の娘と見わて十七八の乙女、肌清く色白きが晚餐の給仕に出で、此所の風俗名所を語るも興多かりき。

主は年配六十有餘、福々しき老爺にて邪氣なき話振り面白く、

「は、あ油畫を御描きになりますので、其れでは大阪に居られます山内様なご御存じでせうか」

「其れは山内愚僊なら僕の始めての先生だよ」と山本子は談る、

「左様で御座いますか、いや最う山内先生が此所を御通りの時分は今から十七年も前の事として、大阪へ初めて御出でになる時ですから西村天囚様と御二人で随分御二人とも御難澁でした。何しろ懷中が三十五錢しか無いのでし

たよ、手前共はなあに幾日居らじつても關ひませんと申上げて、一週間計りも御滞在でしたが、福島では何所も快く致さなかつた相で、木曾は不人情な所だと先頃大阪で御目に懸つた時御話してました。今ぢやあま御存じの大阪の先生ですが、随分其の時分の事を御目にかゝると御話して御笑ひになりますよ。私も毎年商用で大阪に上りますので、其の節書て下すつたのは之です。私と唐紙へ墨繪の淡彩せるを出して我等に示しぬ。流石大家が十何年前の作と聞けば面白かりき。斯くて寫真など數多出せる中に、山内門下の集合寫真の中に、友なる赤松麟作子など有りて、思ひよらぬ所にて思ひ依らぬ人の寫真見て、旅情轉たまさりぬ。

床は次の間に延べさせしに、宿の娘火を山の如くに盛り來りて、炬燵に入れしさへあるに、其の廻りに蒲團の數各四枚、夜着は厚きもの二枚にて風の入る可き隙もなきに、講談物雜誌など取そろへて置きしまめやかさ嬉しく、各床に就かんとして娘の名を問へば永井藤江と申しますと、山家に似氣なき禮

義正しき、應對に、人品の自ら氣高く見えて床しく思ひき。宿に着きし時は
 三日月暗く鳥居峠の頂に残りしが、寢さめて聞けば雨細う溪流の音に混りて、
 板屋打つ音更に寂しく、明日は雨かと舌打して云へば、雨ならよかると他の
 友の夜着打ちかつぎて、忍び笑するもおかしかりき。
 此の夜山本子は例の風邪にて、鼻すよりながら下に下り行きしに、忽ち宿の
 主に大阪の談續けられて、睡き眼こすりく十一時過まで談りしが、二階に
 上りて寝るや否や發熱せし様にて苦しみぬ。

二

明くれば山々霧深く閉して、空は灰色に暗く、家々の家根に置きし石塊露に
 濡れて面白く光るを眺めながら、出發の用意も爲さず、欄干に腰かけて、鉛
 筆ペン寫生に時を過せば、四面の霧は、漸う雲となり雨となりて、町を出で立つ

鹽尻通ひの馬車の喇叭、遠音を殘して消え去りし跡は、只川の瀬高く轟きて、
 寂しき事限無し、友の二人は今朝は腹痛すこて困じ居たるに、藤江子は熊の
 膽の赤藥を湯煎にして持ち來り、優しく看護し呉る嬉しさに、二人は今日
 最う一日宿泊せんと云ひ初めつ。午迄は空晴れず、欄干より首さしのぼして
 四邊の景色眺むるに、主來りて、此の前の山は天照山あまてらやまと云ひて二千年來未だ
 開けざる所、絶頂には三方が池と云へる有り、峯は三つに別れ、登るに澤多
 くして頂までは大凡四里、瀧は三四箇所有りて中々風景に富むと語りぬ、折
 から十二三なる男の子、階子昇り來るを見れば、裾くびれたる袴穿ち居るを
 何ぞと問へば、雪袴ゆきかほとも踏込ふみことも云へど、藪原にては半袴はんかほと云ひ、福島にて
 はカルサンと稱へて、所に依りて異れりと云ふ。
 斯くて午過ぎて、雲の晴れ間に青き空折々見えて、鳥居峠登り行く旅商人ら
 じき人の後姿、遙かに見ゆるに、後に心は残れども行手の方も急がれて、是
 非なく午後三時頃、惜しき袂を別つ事となりぬ。哀れなるは旅路の別れか

な、相逢ふは東の間にて、別れては天外萬里の客となり、雲ある山の彼方、月の出入りに思ひ忍びて寂しさは盡きず、果敢なく残すスケッチの面影は、都への土産にと、寫生せんとして頼みし時、快く許せし其の人は、遂に畫中に其の面影を止むるに過ぎざりき。

宿の者一家悉く店に出で、見送り呉るゝに何と無く涙ぐまれて、然らばとて出立つ。主は我等の金剛杖持ちて、峠の下迄見送りしが、何所迄行きても名残は盡きず、最早此所にてと主より杖受取りて別れを述べ、見返りなく歸り行く主の方を見返りながら、藤江子が云ひし舊道を心掛けて進む程に、だら／＼上りの山幾度か曲り／＼と、奈良井の宿は崖の彼方に隠れんとす、折しも牛をやる男の鞭をあげて、

心細さにヨ一出て山見ればヨ一

雲のかゝらぬ山は無あい

と信州名物の小諸節聲美はしく登り行く。

三人は暫時立ち盡しぬ、日は斜めに我等の影を引いて、麓の町は森暗き彼方、昨夕耳につきし奈良井川の流れ白く見えて、宿の二階も指さす可う、今宵は如何なる宿に着きて、如何なる人に遇ふやらんと思ひて、只寂しくも眺め入りぬ。我がスケッチの端に残せし歌一首

門を出でゝ其人見えず峠越えて

其の家見えず旅路のわかれ

斯くてやる瀬なき岡を抱きて、右に迷ひ左に戻り、遙かに遠き稜道牛追ふ人の見ゆるを心あてに、落葉の谷を見下しつゝ次第／＼に登り行けば、一時間計りにして鳥居峠の絶嶺、弘法大師御力水の邊に至る。

我等は今木會の深谷を望みぬ。我等は今日日本の山嶽國、信濃飛驒の連峰を下瞰して、清澄水より明らかなる大空の下、峯吹渡る木枯に旅の衣を翻せり、蜿蜒たる山又山は波の動くに似て、或は高く或は低く、雪を頂きて日に映する地平線の彼方、雲は雪に接し、雪は雲に交りて、陰影定かならぬ色を作り、近

く麓に展開する無数の大谷は、中ばは山の陰影を受けて、幽深なる趣を包みたり。斯くて山上の御嶽遙拜所を寫生して、雲に隠れし御嶽の位置を、彼方此方と想像しつつ山を下れば、谷より吹き上る風冷やかに外套をあほりて、山陰なりし落葉の道は、霜解けもせで凍りたり。木深き新道を行く事三四町、山鳥の俄に立つ羽音に驚かされて、數ふれば大凡六羽計り、石さへ達く短距離に再び舞ひ下れるを面白がりて、山本子が頻りに草叢深き茂みを覗ふもをかしかりき。

麓は即ち藪原驛にして、名物お六櫛の看板、紅く白く軒毎に釣して、全村悉く櫛細工なすも珍らしければ、と有る店に寄りて二三枚の土産購めて、隠袋におさめ、卒いざとて出發の用意をなす。暮るゝに近ければ空腹を凌がんと、薩摩芋購めたるに三錢を投じて、細きもの僅かに一本、其の價の方外なるに驚かされ、匆々にして走り出づ。日は既に亂雲の中に陥りて、空暗く風急に、荒廢せる山驛の煤けし軒を離るゝに従ひ、屏風を立てし如き左右の山は、或

は迫り或は離なれ、木曾川の溪流次第に脚下に現はれ來りて、瀬をなじ岩に激し淵に沈みて、流るゝ水の音高く、四山に反響し、夜色愈々更けまされば、坦々たる道も歩むに危く、見れども見えぬ四邊の風光を想像しつつも、或は上り或は下り、踰躑としてたどり行けば、雲間を漏るゝ月折々明るく、雨上りど見へて濡れに濡れたる大路は白く光りて、露に輝く落葉の色美はしう、玉を綴れる草叢つゞき、唧々たる虫の音たえゞくに聞こえて、寂しき夜道は愈々寂しく、陰晴窮りなき空の景色は、時に時雨を誘ひ來りて、茫々として煙の如き狹霧の裡をさまひ行けば、宮の越の宿に近く燈火漏るゝ一つ家有り。足は夜道に疲れ、時は八時を過ぎて、空腹なる事云ふ可からず、忽ち跳り入りて、何にても食ふ物無きやと尋ねれば、熱き餛飩か、しる粉なりと云ふ、我等は火にあたり澁茶飲みながら餛飩造る間主人の語る話を聞けば、此所は中仙道は名物あめの餅の茶店にて、お蝶の小鹽と云ひし美人、昔時此の家に有りしと云ふ、今も名物の名は残りぬと云ふ、話の中に急はしく入り來りし

は、年の頃三十近き疲せたる男、郡書記なりと自ら名乗して、同じく鯁鮓三
椀をかたむけしが、我等は此所に充分の腹を作りて、知らぬ夜道に道連得し
を心嬉しく、然らばと云ひて立出でし時は、雨少しく晴れて、見上る空の星
微かに光りぬ。

宮の腰を過ぎて福島町に入るの間、郡書記は様々の物語して、木曾風俗の如
何に面白く如何に珍らしきかを我等に語りぬ。殊に木曾川の急流、谷深く山
高き僻地に入りては、此方の岸と彼方の岸と、渡るに舟無く越すに橋無く、
只僅かに釣越しと稱ふる四條の鐵條の上を、大なる箱の車付きたるを載せ
て、乗りたる人自ら綱を引きて、岸より岸に渡るもの有り、下は激流奔湍思
の儘に流れて、手を放たば忽ち木曾川の水泡となる可き、危険きものなれど、
昔時より今に至る迄、さる事無しと傳え聞きぬと云ふ。

我等は斯くして福島町に入りぬ、郡書記に別れ越後屋の送り状持ちて、葛屋
といふを音づれしに、雨戸も開かず、中より我等の風姿さし覗きて、部屋な

ければと辭わる面憎さ、小雨降り頻れば帽箱を落る雫も心地悪く、漸う人に
尋ねて俵屋に至る。

家は木曾川の流に臨み、水聲近く枕に通ひて、嘈々たる音夜もすがら絶えず、
寂しき風の音なひにつれて、遠き山に鳴る太鼓の響、彼れは何ぞと聞けば、
料理店にて藝妓呼ぶ相圖の太鼓なりといふ、さても面白き山住ひかな。

三

師走六日、蕭々たる軒の小雨は、溪流の音に交りて寂しく、欄干に倚りて眺
むれば、福島町の山より山の中腹に建てられたる瓦光粉壁、悉く濡れて、後
方を圍める常盤木山は、蜿蜒として波濤の如し。朝描き初めし水繪の仕上ら
ぬ間に、日の光微かに漏れ来れば、釣橋渡るカルサン姿の往來もおもしろく、
福島町の全景を見て、木曾義仲の古墳尋ぬるも興有る可しと、寫生帖持ちて

宿を出づ。先づ川を渡りて、右に行く事二三町、興禪寺の山門に達す、寺は四百八十餘年前草創の儘にして、世々の領主時に修繕をなせしと雖も、荒廢せる本殿の屋根に草茂り苔蒸して、磬缸の響も無く、雨に濡れたる银杏樹の落葉、地に委して美はしき事黄金の如し、此所よりは福島町の全景一望の下に集りて、木曾川の清流白く流れ去るを見る可く、鐘樓の邊を右に山少し登れば義仲の古墳に達す。

松杉暗き前山後山、嵐氣搖曳せる四邊の翠微に幾百年の歴史は寂しくも残りて、國破れて山河在り離々たる荒草烟迷ひ霧棚引く古城の趾、今は空しく墳墓の地となりて、誰弔ふものも無きに、無限の愁思を抱きつゝ、聽て鉛筆寫生して町に歸りしは午なる可し。

夕近くなりて、又も降り來る雨に爲す事なければ夕景を描き、其の夜は早く睡眠に就きしが、明くれば夜來の雨未だ霽れず、雲厚く風冷やかなれど、今日は是非とも寢覺に行かんと、午後三時俄に此所を發足しぬ。

道は之より木曾川の奔湍を傳ふて、坦々として砥の如く、紅葉既に散り盡したる、山又山の冬の姿は、無限の寂しさ静かさを包みて、蜿蜒として連れり、蕭々たる雨、荒涼たる道、鶏犬の聲を遙かに遠き雲中に聞きつゝ、或は上り或は下り、笠傾けて雨を避けんとすれば、峰吹き下す風颯と音して笠拂ふ事屢となりき。溪に沿ふて進む事大凡二里、鏘々たる激流の音を遙か谷底に聞きなつゝ、水車めぐる邊を過ぎて、雨に濡れたるだら／＼坂を、下に／＼と下り來れば、兩岸の山漸く迫りて、疊々たる巨岩怪石は怒るが如き激流を迎へて、静かに一大深潭を作り、黒松高き彼方の岸より、二條の鐵條長く引きて、僅かに渡る小舟を浮べぬ。

命をからむ葛かづらの舊蹟、棧の名残は即ち此所にして、今は溪に臨める一茶亭に、古き招牌有りて、僅かに其かど點頭かるゝのみ、古昔は如何なりけん、紅葉満山の錦を飾りて、水蒼く岩白きはとり、見る目危き葛のかけ橋ゆら／＼と、命を載せて揺めきなば、其の景其の情如何ある可き。我等は路傍

の石に踞して、雨降る中に寫生して雲に隠るゝ山、雨に烟れる遠樹、近くは溪を蔽はん計りに、蒼鬱として影をなせる、岸の大木の形など、思ふが儘に描き終れば、卒として此所を立出たり。

棧を出で、僅かに十町、夕暮近き山々の間に、川を抱きて凹みをなしたる一帯の平地、上松驛の白堊微かに見えて、遠ざかり行く溪流の音は、町に近づくに従て、愈遠く隔たりぬ。上松は福島に次ぐ都邑なりと聞けど、我等はひたすら道を急げば、唯長き町を物も思はずで打ち通り、雨暗く風白き、山又山の夜道をたどりて、唯目に入るは路傍の烟、暗き森、ちよろ／＼落る筈の水、迂餘曲折するに従て、燈火無ければ暗き事限なく、時に思ひも依らぬ山の腹に、有るか無きかの燈火一つ見出して、人住む所かと疑ひつゝ、斯くても過さるゝ人の一生を、羨みながら語り行けば更に竹籜の大なるを幾つか過ぎて、寢覺驛に達しぬ。越前屋に至りて、宿泊頼めば、其れ御洗足水其れ御火をと主人自ら指圖して、奥まりたる八疊の部屋に誘ひぬ。

暫時して例の炬燵に、風呂上りの身體温めつゝ雑談に時を移せば、女來りて「御宿泊は御蕎麥に致しませうか御飯に致しませうか」と云ふ。

此所の名物は浦島太郎の寢覺蕎麥と、兼て聞き置ける事も有れば、さらば蕎麥をと命じたるに待つ間程なく持來る、空腹なれば旨き事限なく、各三椀を傾け盡して、早くも寢床に入らんとすれば、名物の御花漬は如何と云ふ。

露伴子が風流佛に、須原の花漬賣の乙女を見て、木曾の風流を喜びこは一昔旅の初め須原に行かば、必らず花漬賣の女見んと思ひもうけし事は、此の時迄も忘れてありしが、斯くと聞きて嬉しき事譬ふるに物無く、急ぎ取寄せて之を見るに、三寸計りなる小さき箱に、桃、櫻、茶の花、菊の花、薄荷の花、紅き白き様々の色を取交へて、或は苔の儘或は咲きたる儘、色も褪せず萎れもせず、四季の眺めを一時に集めて、美はしき事云ふ可からず、雪降る冬の深山路に、かゝる風流の殊更うれしく、四つ五つ土産に購めて都に歸らば人にも語り、友にも傲らんと、背囊の底に深くも收めぬ。

四

臨川寺の庭に立ちて、寢覺の床を下瞰したる我等三人は、寺僧の案内につれて寺の縁に歸り、進むる儘に足半草履あしなかの小さきを穿きて、再び絶壁の上に立ちぬ。

溪に下るの道は、竹林の間を通じて、僅かに足を入るゝに過ぎず、雜草いやが上に生ひ茂り、荆棘頻りに亂れかゝりて、下るに従て愈峻けはしく、岩に鈍り、樹の根に凭り、ばら／＼と散る露に濡れつゝ、苔蒸す岩の下を潜りて、小さき飛瀑の邊を過ぎれば、小山の如き花崗石の巨岩、累々として重なり合ひ、其の快其の爽云ふ可からず。

象岩と稱ふる巨岩の上に立ちて、四邊の風光を眺むれば、屏風岩、硯岩、獅子岩、烏帽子岩、釜岩、狙岩、浦島の釣舟岩、各形を異にしたる巨岩怪石水

を挾んで聳立し、幅大凡七八町の間、一大奇溪を現出せり、見よ木曾川の流は此所に至りて、三四間に狭せままり、深潭をなして、流るゝ如く止まる如く、沈々たる暗碧色の水は音せて遠く流れ行く。あはれ其の色の美はじさよ、碧き水は白き岩の影を映して、底深き事限を知らず。稱じて浦島が綸を垂れたる舊蹟となすもの、又故なごと云ふ可からず、右に聳つ中央の巨岩には赤松數多生ひ茂りて、此所に浦島の祠を安んず、之は玉手箱を開きし跡なりと云ひ傳ふれど、三歸翁と云ふ者、嘗て此所に釣せしより、次第に誤を傳へしともいふ。

我等は日影暖かなる巨岩の上に座して、寢覺の床の全景を描く可く、水繪の道具取り出しぬ。斯くて二三時間を費して、僅かに一枚を描き終れば、再び元來し道を登りて、寺の縁端に履物を替へ、宿に歸りしは午少し前なりき。寢覺を立ちしは午後三時に近く、風無き空の日光は暖かに、山畑おかは續き陸稻干したる山村を過ぎて、がたり／＼と惰ものうげに廻る水車幾つか數へし程に、一度

遠く離れし木曾川は、再び來りて脚下を駛り、激流奔湍愈々出で愈々奇に、歩むに從て兩山次第に遠く舒びて、小野村の大溪谷はパノラマの如く現れ來る。我等は此所に道の左り、十數丈なる絶壁の上より、軽々として瀉下する飛瀑を見る、其の形奇ならざるに非るも、日光の諸瀑に飽きたる身は、深き感興を呼ぶ事無くして、僅かに鉛筆の寫生をなせしのみ、其の名を問へば小野の瀑と云ふ。

斯くて立町を過ぎ須原に至りし頃は夜に入りて、空をこめたる山霧深く、朧々の十二日の月は、水汲む人の影を照らして、寂寞たる古驛の趣、いふ計りなく靜かなるに、道の中央には石にて圍ひし古風の井戸有りて、淡島神社の燈籠其の傍に寂しく立てり。我等は月明りに僅かに寫生して、須原を後に道を急ぎ、野尻に着きしは九時近かる可く、加納屋の奥に夕餉の膳に向ひし時は、睡氣頻りに催し來りて、箸取る事さへ懶かりき。

十二月九日の朝まだき、料理其他何くれと無く心盡せし、主人が好意に酬ゆ

る金も無ければ、切なき思を胸に抱きつゝ、別を告げて立出づれば、道は坦々たる事昨日の如く、溪流次第に奔跳して岩に激し岸を拍ちて、大河の趣を備へ來り、谷は深くして老杉暗く、朝の水烟微かにのぼりて幽深窮り無き大溪潭をなす、加ふるに白き花崗石の怪巖青き松の間に聳立して、沿岸の風光、或は奇に或は大に、三留野に至る約二里半の山路、足を停むる事屢々なりき、且つや時はれ伐材の期に接して、御料局の官材を流すもの、無慮百二三十人、一潭毎に小舟を浮べて、隊を爲し、聲を合せ、上流より流れ來る木材を選びて、長き鳶口にて或は引き寄せ或は流し、岩を飛び谷を傳ふて活々として働くもの、其の壯其の快筆紙の盡す所に非ず、我等は暫時絶壁の上より之を寫生して漸く三留野に至る。

三留野より讀書を過ぎ、吾妻橋に至るの間、道は暫時溪流を遠ざかりて、松杉暗く崖崩れ草亂れたる舊道をたどり、山嵐空翠の裡へと登り行きしが、次第々に里に離れて、鶏犬の聲も聞こえずなりしに驚きて、漸く畑うつ女に

道を問へば、之は古昔の馬籠峠にして、兎ても明日ならでは落合に至り難かる可しといふ、更に新道に出づる道を詳しく尋ねて、道なき松林の間を抜け、畠を越し崖を下りて、僅かに元の道に出づ。其より行く事一町許り、兎ある馬車屋の前に至れば、頻りに乗車を勧めし程に、中津迄は一圓八十錢なりといふを押問答の末一圓五十錢の約を爲し鯉鈍屋に來よと命じ置きて、鯉岩の邊なる吾妻橋の飲食店に入りぬ。

長き旅路に疲れたる我等は、今宵中津川より瀛車に投じて、名古屋市に入る樂しみを豫想しつつ晝餉終りて今や來ると、乗合馬車の姿を待てども、三分過ぎて喇叭の音も聞こえず、一時間餘りになりて、更に馬の嘶きも聞こへざりしに、我と中澤子は、餘りの待遠しさに堪え兼ねて、一二町ばかり戻りて見れば、馬車屋の店は其と覺しき車も見えず、扱ては野尻須原への客を載せて、遠く二三里も行きしならんと、空に時間費せし事の口惜しくも、是非なく其所を立出でたり、之より山口村に至るの間、木曾川の溪流は急駛奔放

の妙を盡して、四方の山々或は高く或は低く、鬱々たる大深林に沿ひ、峨々たる絶壁を浸して、純白なる花崗石の日に耀く間を走る深藍色の水は、彼方此方に無数の木材を浮かべて、色彩の絢爛なる之を描きて冬の景といふとも其を信するもの少なる可し。

山口村に着きしは午後六時に近く、吾妻屋と云へるに一泊しぬ。此の夜、宿は木材を買ふ者多きとかにて、風呂も一度に入らん事を求めしかば、襦袢外ソヤツ套上着など、鴨居の釘にかけし儘、快く入浴して、夕冷の身體を綿厚き襦袢に着替へ、應て夕餉終りて睡に陥しは九時過なりき。斯くて明くれば師走十日の曉早く、宿の勘定済はらひして立出でしが、珍らしくも霜降りて四方の山々悉く白く、日は薄けれど風静かにて、長亭短驛暮るれば泊り、明くれば立ち、上野下野、南信濃北信濃、紅葉の谷雪の深山、思ふが儘にさすらひし身の今や美濃路に入らんとして、過ぎ越し方の旅路を顧みつつ、そゞろに催す微笑はなみを包みもあへず、物語り行く我等三人、溶々として流れ去る木曾川の大溪流

を、遙かの谷底に望みながら、美濃信濃の境を過ぎて、次第に展開さるゝ山間の平野を右に、落合川近く来りし時は、午にならんとする日光山腹の白壁に耀きて、聽て聞こゆる鶏犬の聲、車馬の響。落合より中津迄は瞬く間に、松籟颯々たる一小丘を越ゆれば即ち停車場にて、目に見るものは白雲流水、耳に聞くものは峯吹く嵐谷川の響、山又山に馴れたる身は、飲食店軒を並べ旗幟日に耀く劇場の前、車馬の轟きに驚かされて漸く停車場近く、来りしが、發車迄には猶一時間の暇ありといふに、と有る饅頭屋にて晝餉の代りを食ふ。

斯くて待つ事三十分計り、卒切符買はんと中澤子は財布開きて群集の中に、立交りしが、俄に周章てし様に引き返して、金足らずと云ふ。我等は片隅に額を集めて、急しく金を改めたり、然れど合計二圓十錢、名古屋迄の乗車賃には二三十錢を不足せり。我等は様々に思ひ惑ひぬ。時は急場に迫りて時計賣るは安けれど、名古屋には既に東京大阪よりの送金、既に着せし頃なるに、

空しく時計賣るも愚に似たる可しとて、遂に名古屋より一驛近き、勝川の切符購むる事としつ、然れど俄かに金圓の不足せしもをかしく、之を中澤子に問へば、昨夜泊りし時紙幣三枚、其の他に銀貨多少を有せしに、今見れば紙幣唯一枚にして、今朝の拂ひは又紙幣一枚と他は悉く銀貨なりき、斯かれば他の一枚は何日如何にして失せしかを知らず、或は風呂に入りし時難に遇ひしに非ずやと云ふ。

中津川を出でしよりは、山々遠く東に退きて、送り迎ふる、小さき丘陵、いさゝ小川の眺めも長閑かにて、或は田園或は原野、蒼々たる空の彼方地平線上に蟠る一團の白雲は、日に映じて雪よりも白く、幾多の小驛を走り盡して、勝川驛に至りし時は午後四時に近く、晚風頻りに客衣に寒き頃なりき。勝川より名古屋までは三里計り、疲れし足をわづかに引きて、坦々たる道を松原續きに傳ひ行けば、小牧山は遙かに渺茫たる平野の上に聳え、冬の日早くも暮れなんとして、斜めに送る夕陽の色は、今しも山の半腹を染めたり。

あはれ美はしき夕の色よ。我等が旅の終りに當りて、自然の色彩、此の如くに美はしき夕の大景に接したる、我等が喜は如何なりしぞ。所は名におふ小牧街道、一路遙かに西を指して、長く連る松並木は寂しき斜陽の影を引きて、颯々たる風梢に遍く、鈴の音微かに聞こへ來れば、枯草積みし白き馬、木の間隠れにちら／＼見えて、聽て近づく馬士唄の一曲、あはれ此の畫の如き晩景の裡に立ち盡して、華やかなりし光と色と、次第々に沈み行く淋しく悲しき光景を眺め、野人が歌ふ多恨の竹枝を耳にして、誰か腸を斷たざる可き。ましてや遠き東の空には、夕靄靜かに野をこめて、莊内川の水白く流るゝ彼方、十四日の月は仄かに森を離るゝにあらずや。

斯くて夕露茂き莊内川の邊を去りて、夢の如き夜霧の裡に、名古屋城の白壁を眺めし時は午後八時に近く、空に耀く星、地にきらめく電燈、人の世の傲を盡したる市街の壯觀に、我等の眼は眩せられぬ。

あはれ、朝の雲夕の雨、旅より旅にさすらひて、夢よりもはかなき跡を留め

し、我等が放浪生活は此所に終りぬ。

日本地理圖

編



旅の歌

那可佐波

秋の日の淺間の煙雲となりて白雲飛びぬ上つ毛の山
欄干に木の葉散る日や湯の花を母におくると友いでたちぬ
北信濃いでゆの烟立つ村の朝の別離の道に雪ふる
道四里を雪の山見ぬ湯の客と旅商人の乗合馬車に
黒姫の山指して舟橋をわたる大河の水に夕日す
紅の緒の結付草履峠越ゆる旅の少女に菅笠ほしき
秋の旅の道に拾ひし銀杏葉に歌など書きし諏訪の旅籠屋
鯉躍る池に葎の音ききて炬燵する夜の更けにけるかな
海戀ひし富士が根見ゆと峠路をかへり見しつゝ又木曾に入る

峠越えて木曾に入る日と日記かきて夜の枕にきく雲かな
木曾おろし川の音して宿とらん村の灯見えぬ夜道を行けば
杉の葉の酒賣る門のともしびに里の名よめる旅姿かな
花漬を召せといふ子は粧して月に水汲む木曾の町かな
月に行く吾影落ちぬ残雪と木曾の溪瞰る河原の石に
妹にとて櫛賣る店の門に立てば夕雨さそふ木曾山おろし

貞子

長野にて(城山に立ちて)

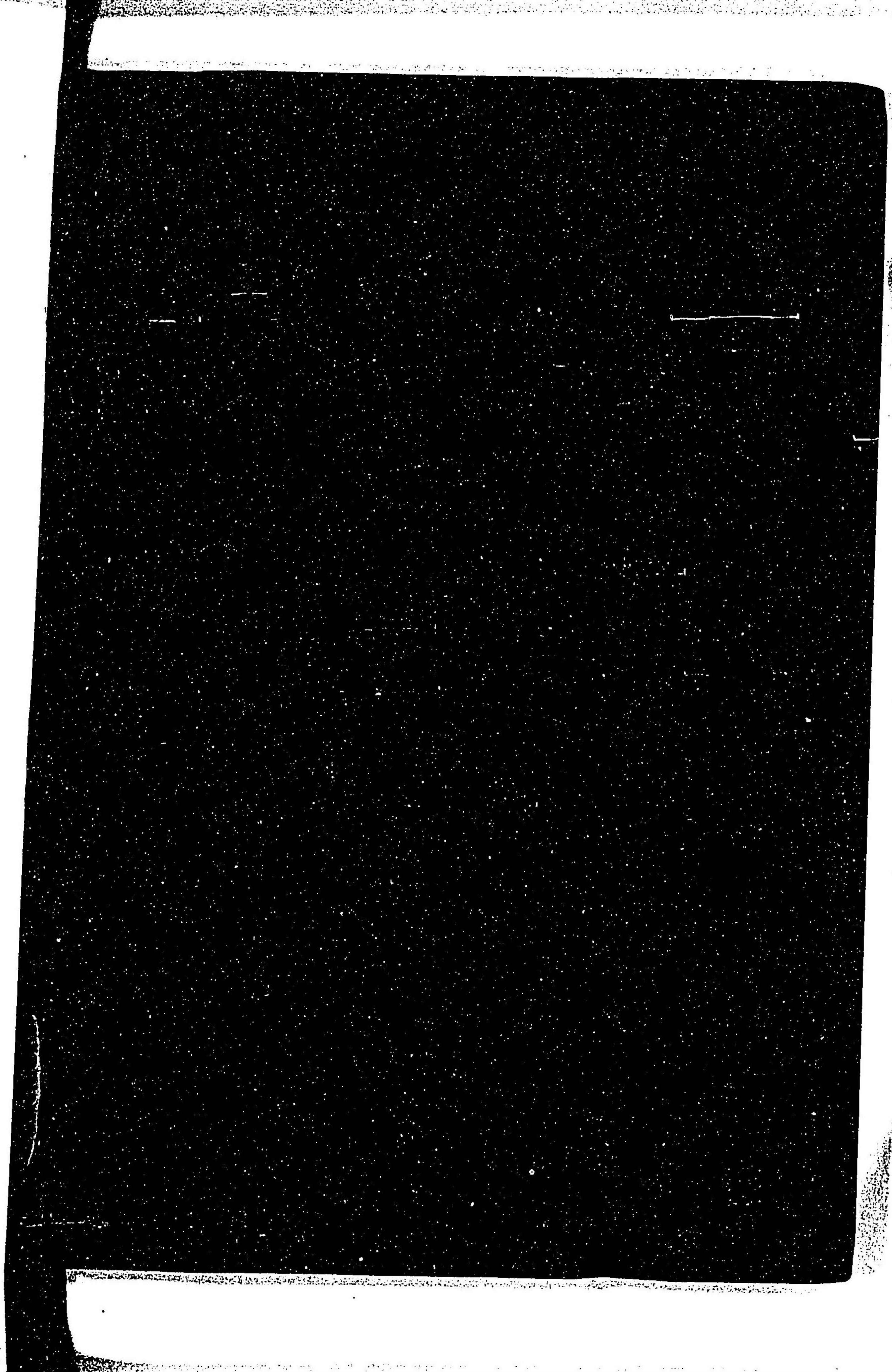
一じきり森の鳥の鳴き立ちて立つ岡の邊の我が影消えぬ
霜置ける朝諏訪にて

ほのくくと朝霧の中にあけて行く鎮守の森の梢の白き
まぐれ降りてみぞれになりて雪になりて西より晴るゝ諏訪の湖

人形の帯はむらさき抱く子は亂れし髪に野の花さして
黄泉に咲く其の一花に愛ありと摘みてかくしぬ白日の夢
友や來ん我や行かむの山住に雪降り出でゝ二十日にあまる
欄干に燈火見えて影見えて夜の雪降る山の湯の宿
雪吹雪先なる人をかすめたり北信濃路の師走冬空
細き江の柳小村は夕くれて今し峠に白き雪降る
湯あがり髪を夕宵のおぼしまに月見る人の眉美しくしき
紅や黄や紫やあまつ神の御衣うつらふ諏訪の湖
門を出でゝ其の人見えぬ峠越えて其の家見えぬ旅路のわかれ
木曾の朝を峠に飛驒の雪指して風に吹かるゝ糸だて姿

四 絃

30
467





023052-001-7

30-467

日本名勝写生紀行

岡野 栄等

M39-43

ADB-1029





023052-001-7

30-467

日本名勝写生紀行

岡野 栄等

M39-43

ADB-1029

